令和８年度羽田中学校だより

天 空 の 橋

令和８年９月１６日

目指す生徒像・・・
Heart
Never Give Up
Do Our Best

大田区立羽田中学校

承認の挨拶（あいさつ）をしよう

校長　小川幸男

２学期の始業式に「みんなで承認の挨拶をしよう」という話をしました。

挨拶には、大きく二つの意味があります。一つは、礼儀としての挨拶です。相手への尊重を示したり、節度をわきまえていたりすることを示すためには、礼儀作法に則った挨拶をする必要があります。もう一つは、承認を示すための挨拶です。「あなたがいることを気づいているよ」というサインを送り、共通の社会の一員（仲間・友達・同僚…）であることをお互いに確認するためのものです。

このうち「承認の挨拶」をしようということが始業式の話でした。

なぜ、「承認の挨拶」が必要なのか。始業式では、人の気持ちが安定するためには、「強く深い関係」でなく「広く緩やかな関係」だからだという理由を、岡檀さんの自殺稀少地区の研究（『生き心地の良い町』講談社、２０１３）から話しました。

「深すぎる関係だと、相手を気遣ってむしろ相談できなくなる。嫌といえない関係になると同調圧力から心が苦しくなってしまう。」というのが研究からの結果です。緊密で深いけれど少しの人としかつきあわない地域より、町で会うと挨拶をし、雑談をするような人が多くいるが、その人たちと縛り合うような関係にならないことが、心の安定した地域の特徴なのです。

中学生でいえば、「親友だけに閉じてしまう」ような関係はあまりよくありません。特に、他の人の悪口や愚痴を言ってそのグループだけで固まるような関係だと、お互いにそのグループから抜けられない縛られた関係になります。ときとして、意見や気持ちの相違があっても、同調するしかない関係になり、苦しくなってしまいます。

いろいろな人と雑談ができるような関係、「Aさんとはアイドルの推しの話をする」、「Bさんとは趣味の話をする」、「Cさんとは……」というようになると、自分の気持ちを解放するチャンネルがたくさんあることになり、安定するのです。

また、「広く緩やかな関係」の集団（クラス・学年）だと、誰でもが溶け込みやすくなります。親友同士で固まった「強く深い関係」のグループがたくさんになると、なじめない人が行き場がなくなってしまい、学級や学年などに入りづらくなってしまいます。

もちろん、親友はいていいと思います。本音で言い合える関係は貴重です。しかし、多くのみんなと雑談できる「広く緩やかな」関係をつくれるといいなと思います。その方が、心が安定するからです。その関係づくりの基本が「挨拶」なのです。

さらに、もう少し「広く緩やかな関係」の必要性をお伝えします。いじめに関連する内容です。

保護者の皆さんは「いじめ」と聞いてどのような状況を思い浮かべるでしょうか。「クラスみんなが一人の生徒をターゲットにして無視する」とか、「数人のやんちゃなグループが弱い生徒を呼び出して暴力を振るう」といった行為を思い浮かべるのではないでしょうか。

しかし、現在（羽田中に限らず）そういった典型的な「いじめ」は、ほぼ無くなっています。こういった「いじめ」は20～40年くらい前の「いじめ」なのです。昔の「いじめ」は、誰がいじめられているか、クラスの生徒がみんな知っている中で行われていました。ほとんどの生徒が、直接「いじめる」「知っているけど傍観する」など、何らかの形でそのいじめに関わっていたのです。（※注）

しかし、現在の生徒は、多くの人と連携して一つのことをすることが少なくなっています。

趣味が一緒だったり、気が合ったりする数人とだけ友だち関係になり、あとのクラスメイトは（昔でいえば）「知り合い」に近い感覚になっています。

そのため、学校という場で生身の生徒が、集団で誰かをいじめたり、無視するようなこともほとんど起こらなくなったのです。（SNSを介してのものは、人間関係が薄い生徒も含めておこなわれてしまいます。これは大きな問題であり、本稿の論点とは別に考える必要があります。）

では、（ネット空間でなく）現在の学校現場で起きる「いじめ」はどんなものなのでしょうか。

実は、生徒が「いじめ」として訴えてくるものには、ふだんつきあっている仲良しの友だち2～4人くらいから、何かのきっかけで話しをしなくなった（話しをしてくれなくなった）という状況が非常に多くなっています。

「みんなから無視された」といっても、クラスや学年の大勢であることはほとんどなく、今まで仲が良かった2～4人との関係が悪くなったという状況が「いじめ」として捉えられるのが、今の多くのいじめなのです。特に「無視」や「悪口」などがあると生徒にとって辛い「いじめ」として認識されていきます。

昔に比べれば、いじめの規模は小さい。しかし、今の生徒にとっては仲の良かった2～4人との関係が崩れることは非常に辛いできごとです。なぜなら、他に逃げ道がないからです。他につながる人間関係がつくられていないからです。逃げ場がないという意味で、昔みんなから「無視された」「いじめられた」と同じくらい辛い状況になってしまうのが今の中学生なのです。

では、どうすればいいでしょうか。「クラスや学年全員から無視されているわけじゃないでしょう」などと伝えて我慢させる指導は、よくありません。今の生徒にとって耐えられる状況ではないのです。

もちろん、関係する生徒と仲を調整する必要はあります。しかし、攻撃的な言動（無視とか悪口など）をしないようにはできても、元の関係まで戻すことが絶対できるとは限りません。人の心の内面までは、指導により簡単に変えられないからです。

すると、指導・調整により「いじめ」とは言えない状況にまではなっても、友だち関係があまりない状況になりかねず、学校に行きたくない気持ちが強くなったり、ときとして不登校になったりすることもありえる状態になります。

つまり、人間関係のつながりが少ない状況だと、起きてしまった「いじめ」を指導・調整するだけでは、望ましくない状況に陥ってしまう可能性が高いのです。

そのため、対処だけでなく予防が非常に重要だということが結論となります。つまり、人間関係のつながりを多くしておくことが、現在の「いじめ」対応として本当に大事なのです。

先述したように、いろいろな人と雑談ができるような関係、「Aさんとはアイドルの推しの話をする」「Bさんとは趣味の話をする」「Cさんとは……」というようになると良い訳です。

いざというときに、逃げ場がある。他の人と話せる。それが大事になります。

その最初の一歩が「挨拶」。礼儀としての挨拶ではなく、お互いを承認するための挨拶をすることが「いじめ」の予防につながる学校の人間関係をつくる上でも、大切なのです。

2学期、「同じクラスの人」、「同じ学年の人」、「同じ部活、同じ委員会の先輩・後輩」、「先生」……。承認のための挨拶をみんながお互いにしてくれることを期待しています。

※注 石井光太『傷つけ合う子どもたち 大人の知らない、加害と被害』（CE メディアハウス、2025）には、私の観察と同様の記述があります。現在の日本の中学生像を知るために、とても勉強になる方なので、興味がある方には、一読をお勧めします。